

そして死神は何を思う

いーぐれつと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

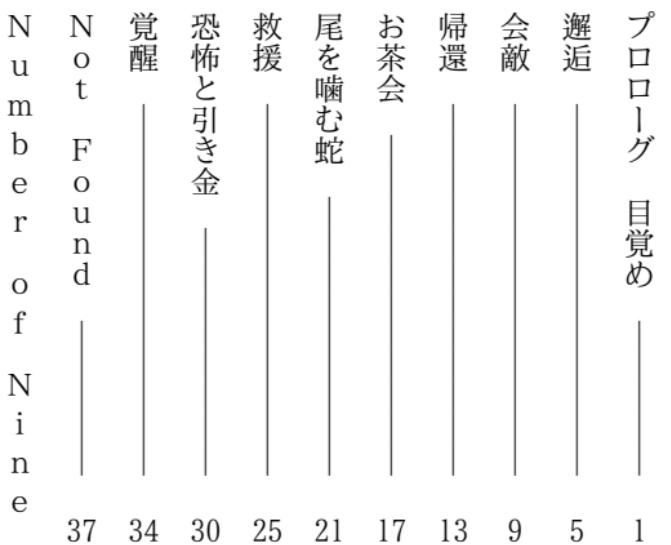
かつて「候補者」に負けた死神部隊の隊長は目覚める事のない眠りについたはずだつ
た。

目が醒めるとそこは見知らぬ基地の中。鉄血を名乗る少女達に出会う
荒廃した世界とその行く末、彼女達の闘争に死神は何を思うのか

※ストーリーは本来のドルフロのストーリーから大きく逸脱したものとなつていま
す。大体勢いで書いてるのでガバガバな部分が多く見られたりよく分からぬい部分
や矛盾したりする部分が出てきますのでライブ感で読んで頂ければ幸いです。受け付
けない方は素早く回れ右をお願いします。

三

次



41

閑話休題 新年へと向かつて



D
A a
f y.
t
e
r A
D f
a t
y e
r

D
a
y
s

プロローグ 目覚め

もういい、言葉など既に意味をなさない

私は空を舞う。最後の候補者を殺すために
ライフルを撃ち込む。避けられる

粒子を炸裂させる。避けられる

ミサイルを叩き込む。撃ち落とされる

最後の候補者たり得る強さだった。

地に墜とされる。声が鳴り響く

「その程度想定の範囲内だよ!!!」

もう一度空へ舞う、戦う為に、殺す為に、死ぬ為に

私は敗北した。最後の候補者に。黒い鳥に
爆発する身体、鳴り響く警告音。

薄れゆく意識の中私は満足していた

戦いはいい、私にはそれが必要だ…。

かつて世界を滅ぼした兵器は大爆発を起こし崩れ去つた。

「ここは…？」

微睡む夢と現実の間で目覚める。

鮮明になる視界、覚醒する意識の中不意に声を掛けられる

「よお、目覚めたか？」

私は困惑した。何故生きているのか、何故死んでいないのか

「どうしたよ、聴覚モジュールに異常でもあるのか？ オイ、聞こえてるか？」

ああ…、聞こえている問題無い。

「良かった。オレは処刑人つてんだ。よろしくな！ それで、立てるか？」

処刑人。そう名乗った目の前の少女は私に手を差し出す。

大丈夫だ。そう言って大きな手術台の様なモノから降りる

「ここはどこだ？」と聞くと少女はオレ達の家だ。と答えた

「ここ」のリーダーの代理人という者に会うため私は少女に連れられ長い廊下を歩いていた。その間様々な事を聞いた。世界の事、戦争の事、敵の事、人類を滅ぼす事を

少女は部屋の前に立ち止まり扉を叩く

「オイ！代理人、目覚めたから連れてきたぞ！」

何度か叩いていると扉が開き中からメイドの様な姿をした少女が現れた

「聞こえてますよ処刑人、次からはもう少し静かにお願いします」

処刑人は悪い悪い。と悪戯っぽく笑いながら答える

「自己紹介がまだでしたね。私は代理人と申します。以後お見知り置きを」

私はよろしく頼む。とだけ返す

「貴方はSPVD Phantasma ファンタズマそう有りました」

「そう有つた？そう有つたとは？」

「私達にもわかりません。気が付いた時にはデータベースに存在していたのです。だから貴方の義体を用意し目覚めさせました。人手は多い方がいいですしね」

私の武器は？

「ここにあります」

そう代理人がスイッチを押すとハンガーから二丁のライフルと独特の形をしたバツクパックが現れる

「かつこいいじやんか」

私は自分武器を手に取りバツクパックを装着する
懐かしい。

何故かはわからないがその様な感情が巡る
「ではさつそくですいませんが、任務です」

代理人はそう私に告げた

きつと私は今笑っている

邂逅

「問題なさそうだな！」

処刑人は戦術人形の残骸を踏みつけながら言う

武装の確認などを兼ねた戦術人形の部隊への襲撃。

先陣を切つてこい！と背中を叩かれ私は渋々攻撃を仕掛けた。

私達はこの付近にある鉄血の前線基地を探しに偵察部隊として送り込まれていた。
いつもの簡単な任務だ、なんて事考えていた。でもまさかこんな事になるなんて：
「ここのらのエリアだっけ？」

そんな会話をしていると、突然ドヒヤア！と独特の音が聞こえたかと思えば、ズガツ
！という音と共に先頭にいたSMGの子が吹き飛ばされた。

近くのARの子が反撃をした。でもその弾が到達することがなかつた

「なんで!?」

悲痛な叫び。不幸にも狙いを定められた彼女は、次の瞬間に左腕のブレードに両断された：

HGの子も逃げようとした所をライフルで撃ち抜かれ崩れ落ちた
もう逃げられそうにもない。

「指揮官、ごめんなさい…」

ライフルの音が木霊した

「にしてもこんなところまで偵察に来ていやがったか…」

忌々しそうに呟く

人形達の基地は近いのか？

「そんなには遠くないはずだ。だからこつちも対策しねえとな」

神妙な顔で答える

「取り敢えず戻つて報告だな。帰るぞ」

ああ。

そして私達は帰路に着いた

「そうでしたか、報告ありがとうございます。こちらも偵察部隊を出して相手の基地を探しましょう。では発見の報告を確認次第…」

私が行こう。

「貴方は私達と違つてバツクアップが取れないんですよ、もし何かあれば…」
問題はない。

「何を言つても聞かなそうな顔してますね…」

代理人は呆れた様に溜息を吐いた

「いくつか部隊を貸します、それを随伴として出撃してください」

弾薬の装填や整備をし私はまた捜索をしていた。

痕跡は無し…。

手がかりはつかめていなかつたが奴らが来た方角から見ると進んでいる方向にある
のは確かだつた

捜索する事数時間、外周の方から偵察を行つていた下級人形のイエーガーから発見の

報告が入る。

成る程、崩れた廃墟の様に見せかけていたか…。あれは発見出来ないのが領ける。
私はイエーガー達に狙撃の準備を、他の部隊には攻撃の準備を命令した。
数分後準備完了の報告が入り私は命令を下した

グリフィンの人形達が慌てて飛び出してくる。私はそれをライフルで撃ち抜き、ミサイルで吹き飛ばす。

だがこちら側も無傷では無かつた。優秀な狙撃手がいる様だった。此方の狙撃手や前衛にも被害が大きくなる。

見つけた。

一瞬のスコープの反射。私はそれを見逃さなかつた

近くの建物へ蹴り上がり、数瞬の貯めの後左腕の得物を構えながらOBで襲いかかつた。

会敵

ドヒヤア！独特的な音が聞こえ咄嗟に避けた。さつきまで私が居た場所には黒い死神が左腕のブレードを突き立てていた

よく反応出来たと思う。事前に聞かされてなかつたら間違いなく一撃で仕留められていただろう

「こちらワルサー！敵に接近された！援護を！」

「援護に回れないの！なんとか持ちこたえて！」

鉄屑共は結構仕留めたつもりだつたんだけど、まだ数は多いみたいだつた

「やるしかないわね…」

ため息をつきつつ狙いを定めて撃ち込む

でも弾は相手を貫くことは無かつた

「ああ！もう！全然効かないじやない！」

ブレードが振りかざされるがなんとか避ける

「ここじゃ不利ね…」

スマーチを焚きビルから飛び降りる。

「…ツ！」

着地は成功。そのまま徹甲弾を装填し、飛び降りてきた死神に撃ち込む。ズカン！と音を立て右手に持つライフルを破壊した。貫通した弾は右肩に当たつたけど効果があつた様には思えない

ブレードを避けスタンを投げつけ路地から出る。後ろからスタンの炸裂音が聞こえる。振り返えればその場でブレードを振り回している

ダミーに集結命令を出し付近の建物の上や自身の近くに待機させる

ようやく立ち直ったのかドヒャア！と音を立てこちらに突っ込んでくる。

でもこれは好機。ブレードが私の目の前に迫る刹那、ダミーに射撃命令を下し私も引き金を引く

今度こそ撃ち抜く。死神は吹き飛び壁に叩きつけられた

途切れた意識が覚め始める。

こちらも電腦だが生身に近いファイードバック故に強い衝撃で障害が起ころる上、血液まで出て痛みまで感じる…中々に不便だな

AP残り60%

PAとの相性が悪い貫通性の高いライフル、当たりどころが悪ければ死んでいた。PAは大幅な減衰を食らっている。これ以上貰えば一時的とは言えPAが使用出来なくなる。

私は一か八か賭けてみることにした

「仕留めた!?」

サイドアームを構えながらゆっくりと近づいた時だつた、悪寒がし後ろに飛び退く。ゆらりと死神は立ち上がる

「全ダミーへ、撃て!!」

命令を下し射撃を行わせる

が、しかし。死神は装甲をページしドヒヤア！という音と共に目の前から消えた後ろからの殺気、ブレードを構え私を殺そうと迫つてくる。回避は間に合わない左腕を盾に無理矢理逸らす

「ツ!!」

死神はすぐさまに飛び立つた。その軌跡を追うように銃弾の雨が降り注ぐ
「大丈夫わーちゃん！」

「だからわーちゃんって言うな！」

援護射撃の主であるスコーピオンが瓦礫の上からダミーと共に飛び降りてくる
「わ、わーちゃん…。左腕大丈夫なの？」

「大丈夫よ、かすり傷」

そう答えながら自分のダミー達に警戒の命令を出す

「あの黒いのはなんなの？」

「多分鉄血のエリート…」

ドビヤア！という音の後にダミーから敵発見の報告が伝えられる。そしてダミー達の反応が次々に消えてゆく

「ダミーからの反応が!?」

「わーちゃん!!上!!」

そう言つてスコーピオンは私を突き飛ばした。

大きな衝撃と共に意識を失う前に見た光景は緑色の光が輝く瞬間だった…

帰還

私は笑っている。楽しくて楽しくて仕方がなかつた

驚いた…。

敵の増援諸共引き飛ばそうとしたが、よく反応してきた

人形共の真上から直下しコジマ粒子の爆発、アサルトアーマーをお見舞いする
自らの身を呈して守つたか。

ブレードを構え _{W A 2 0 0 0} スナイパーへと近づく。ピクリ、と動いたと思えばよろよろと立ち
上がる

「あんた…なんなのよ…」

忌々しそうな声で言葉を吐く

まだ戦う意思があるか。素晴らしい

死神が一步足を踏み出した瞬間、WA2000のサイドアームが火を噴く。しかし先

程のダメージのせいでうまく当てる事が出来なかつた

死神はサイドアームを持つWA2000の右腕を押さえつけブレードを近付ける。

貴様は何故戦う？

死神は問いかける。

「私は殺す為に生まれてきたの…！あんた達鉄血のクズを一体残さず息の根を止める為に…！」

そうか、それが貴様の戦う理由か…。

睨みつけるWA2000を氣にも留めず死神が何かを言おうとした時だつた
死神に襲いかかる弾丸の雨、雨、雨

減衰から回復をし始めた今のPAでは受けきる事は難しかつた

増援かこちらの部隊も限界だな…。さらばだ候補者、また会おう。

そしてWA2000をパツと離したかと思えば崩れた建物を蹴り上がつてあつとい
う間に消えていった

「ワルサー！大丈夫でしたか！？」

息を荒く吐きながらWA2000は答えた

「問題、ないわよ…それよりもスコーピオンを…」

助けに来た人形達はスコーピオンを担架に乗せる

「えへへ、なんとか、勝つたね‥」

「あるいは、見逃された。のかもね‥」

満身創痍の二人は顔を見合させて小さく笑つた

「手酷くやられましたね」

帰還した死神を見て代理人は呟いた

奴らの前線基地は叩いた。暫くは機能出来ないだろう。

「わかりました。それでは下がつてくれて結構ですよ。」

‥。

死神は領き部屋を後にした

「よう、やつと帰つてきたか。時間はあるか?」

処刑人か‥。何の用だ?

「他の奴らへの紹介だ」

修復室でフレームの傷を修復し終えた死神は処刑人の後に着いて廊下を進んでいた
「ここだな」

そう言つて処刑人はドアを開けて中へ入る。それに続き死神も入つていく
「おつ、そいつが例の新入りか？アタシはアルケミストだよろしく。歓迎するぞ盛大に
な」

眼帯を付けたアルケミストと名乗る少女は楽しそうに両手を広げて言い、それを皮切り
に各々が死神へと挨拶を始めた

『お茶会』とでも呼ぶべきなのだろうか

まだまだ長くなりそうだなと思いながら私はカップの中のとうに冷えたコーヒーを
啜つた

お茶会

皆が各々死神へと挨拶をしていく、それに対して軽くよろしく。とだけ返していく

「ファンタズマ、なんだか微妙な顔してるけどお気に召さないかのか？」

私は戦っている方が良い。

処刑人は笑いながら私もだ！わかるぜ！と頷いている

お前達の戦う理由はなんだ？

「きっと全員同じだと思うぜ？エルダーブレイン様の為に人間と邪魔をするグリフィンの人形共をぶつ殺す」

…。（この世界には財団など居ない、ましてやただ殺す為だけに戦っている。ならばなんの為に私は戦えばいいのだ？……この世界の黒い鳥になり得る候補者を、あのスナイパーを殺す為に、死ぬ為に、戦いを、闘争をすればいいのだろうか？）：フフフ：悪くはなさそうだな…。

「なんで笑ってるの…ドリーマーこの人怖いんだけど…」

銀髪ツインテールの少女がドリーマーと呼ばれた少女にしがみつく

「多分グリフィンの人形共を慘たらしく殺す想像でもしてるんでしょ。あとしがみつかないでくれるデストロイヤー?」

面倒臭そうな表情でドリーマーはデストロイヤーを引き剥がしている、それを横目に死神は考える

(私は候補者を殺す。きっとこの世界にも居るはずだ。こいつ達は人類の為に人類を殺す。私は人類の為に候補者を殺す。良い利害の一一致ではないか?だがこいつらも候補者になり得るのかもしれない:だが、そうなるのなら殺せばいい。私は殺す、死神だから私は殺せる、人では無いから)

そんな事を考えながら死神は残るコーヒーを啜る

そうしてお茶会も終わり人形達は1人、また1人と席を立つ

「そうだ、ファンタズマ。一つ話しておかないといけない事があつたんだ」

処刑人は立ち去ろうとしていたお茶会の主役を引き止める。
どうした?

「お前の部屋だよ」

私の？必要など無いのだが…？

「言うと思つたぜ…。まだお前の通信ネットワークも完全に繋がつてないみたいだし、何処に居るか分からないお前を任務の度に探しに行くのも骨が折れるからな」

「うか：わかつた。

「結構素直だな。あとな、部屋は相部屋だ。そこに居るウロボロスつてやつと同じ部屋だからな」

「は???なんで私がこんなやつと同じ部屋なんだ????」

話を聞いていたウロボロスは唐突にキレだして処刑人に食い付く

「しゃーないだろ？空いてる部屋はそこしかないんだよ」

「お主の部屋でいいだろう！」

「あー、俺はハンターと相部屋だから無理だ」

清々しい笑顔で非情な現実を突きつける

「私が！なんで！こんな！製造されたて！ホヤホヤのお！新入りと！同じ部屋なんだ

!!!

叫び終わり肩で息をするウロボロス

「まあこんなやつだ。上手い事仲良くやつてくれ」

ショックを受けた顔をするウロボロス

既に決定されてしまい覆らない悲しい現実をようやく受け入れた彼女は半分死んだ
目でよろしく。とだけ答えとぼとぼと部屋へ戻つて行く。
それに続いて死神も後へと続くのだった

尾を噛む蛇

「おーいファンタズマー背中揉んでくれー」

声が部屋に響く

死神は無言で立ち上がりウロボロスの背中を揉む

異様な光景だった。代理人も間違いないなく引く光景だ

普段はプライドマシマシでツンツンしているウロボロスが最早別人ではないかと思うレベルでだらけた顔をしている。それに対して死神は真顔である。実際何も考えてない

数週間前部屋と一緒にされ激おこだつたウロボロスは死神にこう言つた

「おぬしの方が私よりも下つ端なのに部屋が同じなのばおかしい!!!おぬしが負けたら廊下で寝ろ!」

超絶くだらない理由で意気揚々に勝負を挑んだのだが結果は惨敗だった

「なぜだあ!?私はスーパーなエリート! A-Iの蠱毒を生き残った鉄血頂点に立つハイ工ンドだぞ!!負けるなんて私のプライドが許さない!」

処刑人達がまあまあとなだめる

その内ウロボロスは負けたのが相当悔しかったのか駄々をこねていたのだが割愛しよう…。

一悶着の後ウロボロスが死神にちよつかいをかけそれをあしらう、そんな光景を繰り返していた

時々入つてくる代理人からの任務の依頼や模擬戦、訓練ウロボロスも次第に死神へと噛みつく事も無くなつていつた：

「なあ、ファンタズマ」

ウロボロスが何処か寂しげな声で呟く
どうした？

「おぬしは私が嫌いではないのか？」

「そうは思つてはいない。

「処刑人やハンター達は私に接するのも嫌そうな感じでな、最初は普通に接してくれていたデストロイヤーですら最近は目も合わせようとしてくれない…。ちよつと前に代理人に目に余る行動をこれ以上続けるなら…なんて言われてな。皆が私を嫌悪してる

ようにならぬんだ：私は間違つてゐるのか？」

ハハハと小さく笑いながら足も頼む。と告げる

それがどうした？ウロボロスというハイエンドであるのならそのままでいいだろう。

それがお前だらう？不安ならば命令でも下せ私はそういう存在だ。

「そうか…なら、これからも私の良い下つ端でいろ！」

先程とは打つて変わつてにこにこと笑いながらウロボロスは答える

お前の方が立場は上だからな。いいだらうその命令了承した。

死神はなんの抑揚も無い声で返す

そのあと部屋には上機嫌なウロボロスの鼻歌が木霊していた

「ウロボロス、任務です」

無機質な司令室に代理人の声が響く

「任務？」

「処刑人とハンターがかなり苦戦しているようで」

「救援かあ、わかつた。あの2人には貸しを作つておきたかつたからな！」

「あとファンタズマと行つてください。急ぎですので」

۷۱

うるさいぞ。

「馬鹿！馬鹿あ！！速すぎるし怖すぎるんだがあ！？もつとスピードを落とせんのかあ！？」
無理だ。もう少しで使用限界だからページする、それで降りられるはずだ。

「あ、あ、あ、あ、あ、
!!!早くおろじでくれえ
!!!」

ウロボロスの叫び声はもう暫く空に響く事になつた

救援

忙しなく動き回る鉄血の下級人形達、それに指示を出すウロボロスを死神は眺めていた。

「大体の位置はわかつた、だがノコノコ歩いて接近させてくれるほど相手も間抜けでは無い。ファンタズマ、おぬしは空飛べるだろう？派手にかまして二人を回収する隙を作つてくれないか？」

ウロボロスが振り返り死神へと声を掛ける

わかつた。丁度試してみたいモノもある。

そう言つて獰猛な笑みを浮かべた

「ハンター!! 増援はまだなのか!?」

「30分前に代理人から急ぎ救援を送ると通信が入ったからそろそろのはずなんだが

…

「あいつらがあと数分も待つてくれると思つてゐるのか!?」

「分かつてゐる！」

ハンターが手だけを出し射撃をする

「クソつ！弾切れか…！」

手に持つハンドガンを投げ捨てる

「助かるにはこれしかない…。ハンター、俺が囮になるその隙に下がれ」

「処刑人!?何を言つてゐるんだ！お前を見捨てて逃げるか！」

敵がすぐそばまで迫つてゐる事も忘れ口論を始める二人の近くに榴弾が着弾する

「うわっ！クソつたれ！危ねえだろうが!!」

「処刑人！今飛び出すな！」

ハンターの忠告をうるせえ！と一蹴し飛び出るがそれを予想してゐた人形達に狙いを定められる

処刑人！と悲痛な声が響く。銃弾が撃ち出される音とマズルフラッシュが処刑人の死を確かなものにする――はずだった

黒い影が揺らめき処刑人を殺すはずの弾丸を弾き無力化させる

降り立つた黒い死神はドヒヤア！という音と共に右手に装備した巨大なガスバーナ

ーのようナニカを振り抜いた

焼け焦げた匂いが漂う

お前達生きているか?

死神が問い合わせる

「あ、ああ…。」

「おう…」

二人は信じられないといった顔をしながら返答をする

「なあファンタズマ、それはなんなんだ?」

ハンターが恐る恐る聞く

ヒュージブレードというオーバードウエポンらしい。全てを焼き尽くす暴力私の武装の一つとしてデータ

ベースに登録されていた。

「俺も欲しいな」

キラキラした目でヒュージブレードを見つめる処刑人

恐らくお前達では使えない。私自身も何故使えるのかわからんが。

「チエツ、残念だな。まあ助けてくれてありがとうな」

「ああ、お前が来てくれなかつたら私達は死んでただろうな」

礼はいい。さつさと下がれ。奥からまだ来ているようだからな。

二人を下がらせウロボロスへと通信を行う

二人の救援は完了した。これより敵の追撃に向かう。援護は任せた。

『ああ、わかつた！ちゃんと帰つてこいよファンタズマ！』

ウロボロスとの通信を終えシステムをスキヤンモードへと切り替える
⋮感有り。見つけたぞ⋮。

あれは何!? ダミーが一度に全滅した!? 信じたくないけどアレは手に負えない!

「M⁴! M⁴! 聞こえる!? 撤退するべきよ!! 鉄血の増援は化け物よ! M⁴! ? 聞こえてる
の! ?」

直感が騒ぎ立てる、早く離脱しようと。だがまだ下がれない。隊長^{M⁴}からの返事が帰つて
こないからだ

ザザツと音がして通信が繋がった

「こちらM⁴どうしたの?」

「M⁴! 相手は化け物よ! 早く撤退しないと!」

「こつちも敵の攻撃を受けてる！SOPを向かわせるから下がつ

悪寒、死の感覚、果てしない敵意。ほんの一瞬時間が止まつたような感じがした。

ハツとして咄嗟に仰向けに伏せる

ゴオツ！と音と共に黒い影がナニ力を振り抜く。直後、焦げた臭いが漂う

私は自分の直感を褒めながら素早く立ち上がり震える手でSTAR-15^{自分}_{半身}を構え引き金を引く

全て意味をなさなかつた。何一つ効いていなかつた

そして目の前に立つ死神は獰猛な笑みを浮かべこう言つた
グリフィンの人形よこんにちは。そしてさようならだ。

恐怖と引き金

立ち塞がる大きな死が私の絶望感を更に煽る銃弾を弾きながら迫りくる。

恐怖に呑まれる。戦意などとうに消え失せた弾の切れた自分の銃を放り出しホルスターから取り出したサイドアームをがむしやらに撃ち続ける。最後の一発が放たれる

死神の粒子の壁（ライマルアーマー）が消えた

やはりこの程度しか保たないか…。いや、これだけ保つただけ充分か。

死神はなんでもないように咳き。右手の鈍器と化したヒュージブレードを振り上げる

死ぬの？私はこんなところで死ぬの？

足が震えて言うことを聞かない。

お願ひ…。夢なら、覚めて：死にたくない…。ポツンと呟いていた

「A R — 1 5 !!!」

怒号と共に何かが飛来する音が聞こえる

私はさつと顔を手で覆つた。瞬間、死神に榴弾が直撃した
!?

死神はよろける。私は人形だつたことにこの時ほど感謝する日はなかつた。電腦が瞬時に下した命令を自身にファイードバックさせる。サイドアームにマガジンを装填し引き金を一心不乱に引く

身体に鉛の雨を受け死神は崩れ落ち膝をついた

「大丈夫AR—15!？」

「ありがとうSOP…助かつたわ…」

SOP IIの差し出した手を掴み立ち上がる

死神は動かない。俯いた顔の表情は見えず余計に不気味さを感じる

「急ぎましょう」

SOPを急かし立ち去ろうとする

ンフツフツフツフ…。素晴らしい。見事だ。

I,
私
m
は
恐
s
怖
c
し
a
r
y.
た

死神は全身から擬似血液を撒き散らしながら立ち上がる

幽鬼のように揺らめく目と三日月の形となつた口が現状を楽しんでいるだけに見せる。いや、きっとそうだろう…

榴弾の直撃からの咄嗟の反撃は見事だつた。だが私はまだ死んでいない。

ヒュージブレードを投げ捨てる。背部のハンガーラックにセットしてあつたライフルを持ち直しレーザーブレードを構える

落ちかける意識を戦いの感覚と痛みで繋ぎ留める

(P Aの減衰からも回復し出した。ここで殺すには惜しいが…。)

あのスナイパーの時と同じだ。楽しくて、楽しくて仕方がない。以前にはなかつた身体の痛みが生きている感覚を、殺しあう感覚をハッキリとさせてくれる。無駄な機能が私を闘争へと向かせてくれる。

そんな事を考えQ Bでの急接近をしようとしているミサイルが死神とA R—15達との間に割つて入る

「ファンタズマあ！生きて帰つてこいと言つただろうが！もう二人とも回収出来た！撤退だ！撤退！！」

了解した。：次会う時はこの続きを楽しもう。ンフフフフ：。

そんな声が聞こえ死の気配が遠ざかつて行つた
力が抜ける。大きなため息を吐きへたり込む

「あいつ、次に会つたらスクラップにしてやる…」

SOPⅡが忌々しそうに唸る

「SOPⅡとM4と合流しましょう…」

「そうだね」

私は立ち上がり不満さを隠し切れていないSOPⅡと共に合流地点へと向かつた

覚醒

メインシステム通常モードを起動

ザザツとノイズが走る

「やあJ。元気してることかい？」

私は驚愕した。何故この男が居る？

「なんで僕が居るかつて感じだね。君が『候補者』に負けたあと僕も一緒に巻き込まれて君についてきてしまつたらしい。馬鹿げてる？ そうだ、その通りだ。僕も信じられないけどこれが現実っぽくてねハハハ！」

彼は自分が死んだことは全く気にしていない。

「それにどうせ僕が居なくなつたつて誰かが僕を変わりを演じるだけだろうし、何より争いは終わらない、これからも続くからね。いや、アレは始まりにすぎない。それにあの候補者の事だし生き残るだろうし。なんにせよ向かうでの僕たちの出番は終わりだ」

男は笑う。いつも通りに。どうやらこの状況を彼も楽しんでいるようだ

「おっと、そろそろ君の意識が戻るみたいだ、なあにまた暫くすれば会えるさJ。君の願いが成就するといいね。好きなように生き、理不尽に死ぬ。だつけ？ ハハハ！」

目が覚めた。何か夢を見たような気がしたが少々曖昧で覚えていない。ふとウロボロスが隣に居る事に気が付いた

私はどうなつていた?

「!?ファンタズマ!?」一週間もスリープモードになつて心配したんだぞお!!」

ウロボロスはホツとした顔をして死神はポカポカと叩く
そうか。戦局が変わつたりとかはしていいのか?

「おぬし、目覚めて早速そういう事か!?ばかばか! 戰闘狂! ウオーモンガー!」

フツ:相変わらずうるさいな。割れ響く歌のようだ。

「まあ特に問題はなさそうで良かつた……このまま目覚めなかつたどうしようかと思つてた:私のマッサージは誰がすると思つてるんだ!?」

いつもの調子でギヤーギヤーと喚き始める

「取り敢えず代理人に報告に行くぞ。ほら早く起きろ! スタンドアップ!」

了解した。

「あら、目が覚めましたかファンタズマ。調子はどうですか？」

「問題ない。これといった不調もない。すぐにでも戦闘に出られる。

「その調子なら大丈夫そうですね。あとあなたの装備であるヒュージブレードですか。残念ながら回収には失敗しました。あのエリアはグリフィンに奪還されてしまい迂闊には侵入出来なくなつてしまつたので…」

「こいつ、多分気にしてないと思うぞ」

「うなんですか…？」

試してみたかつただけだ。それにアレはブレード部分の維持にエネルギーを使はずる。一対一ならなんとかなるのだが複数を相手するとなるとPAの維持が難しくなる。今の私の出力では連続使用は無理だ。

死神はそういうと任務がないのならシユミレーターを借りるぞ。まだ試してみたいものはあるからな。と言い部屋から出て行つた

「お、おい。おぬし！待て。私も行くぞ！」

ウロボロスは死神は追いかけ部屋から出て行つた

Not Found

冷たい風が吹く暗い闇の中死神は戦闘の爪痕が残る廃墟を見下ろす

ザザツ：通信が入る

『ファンタズマ、そつちは大丈夫か？』

ああ、特に変わった様子もない。

『まあ気を付けてくれ、いつヤツらが仕掛けてくるかわからぬからな。何かあつたら
通信を頼むぞ』

そう言つて通信が切れた

死神はウロボロスと共にグリフィンの部隊が現れると報告の出でている地域の偵察を行なつていた

手掛かりを探す為残骸の上から飛び降りる。システムをスキヤンモードへ切り替え
るがやはり痕跡は確認できない。

数十分程の探索、痕跡は一つも見つからない。ウロボロスへの通信を行おうとするが
繋がらない

ジャミングか？

そう呟くと答えの変わりのようすに榴弾が飛来する

死神は何の事もなくP.A.を展開し榴弾を防ぐ

榴弾の煙が晴れ始めると鉛玉の嵐が迫る

さすがにまずいと顔をしかめ、若干の損傷はあるが問題なく稼働する護衛のイージスを前へと行かせ盾にする

数秒有れば問題ないな。

死神はまだ残る煙に紛れ攻撃を仕掛けてきた部隊の側面へと回るために残骸の影から影へと移動する。榴弾の炸裂音が聞こえ残したイージス達装甲人形の反応が消失した。

先程まで弾丸の嵐が飛んできた位置へQ.B.を使いブレードを突き立てる

うわあ！という声が聞こえ追撃のためライフルを構えるが横から飛んできた榴弾に邪魔をされる。

面倒だ。

先程榴弾を撃つてきた人形に狙いを定めQ.B.で急接近を仕掛けるが

「あなたの運もそこまで」

そう言いながら人形は榴弾を放つ。迫る榴弾を難無くQ.B.で避ける

人形は少し驚いた顔をするが動じていない。ブレードを振り被つた瞬間

——バンツ！

閃光が弾ける

!?

視界が真っ白になる。勢いのままブレードを振り抜くが手応えが無い。かわりにP Aに弾丸の当たる衝撃を感じる。

弾の飛んできた方向を向きながらスキヤンモードへと切り替えた

「さよなら」

声が聞こえナニカが迫る。直後激しい衝撃。P Aが破られ、装甲がひしやげ、ボディが穿たれる感触
があッ！

壁に叩きつけられ地面に倒れた。

「深刻なダメージを受けています。回避してください」

C O Mボイスが鳴り響く

よろよろと立ち上がる。穿たれた穴から擬似血液がボタボタと流れでていた

「あれ？まだ生きてるの？殺すつもりで合わせたつもりなんだけどなあ」

悠々と歩いてくるツインテールの少女は右手に持つ武器に小さな杭の様なモノを装填する

「じゃあ今度こそさようならだね！」

少女は右手の武器を突き立てる。しかし大きな損害を負っているとは言え死神はまだ諦めない。彼の闘争への渴望はまだ満たされていない。迫る杭を避け左手のブレードで一閃

先程まで死に体のようにしか見えなかつた死神の素早い行動に反応出来ず傷を負うツインテールの少女

「ナインツ！」

声と共に銃声が鳴り響く

咄嗟に近くの物陰に飛び込みやり過ごす

さて、どうするか…。撤退したいがそうさせては貰えなさそうだ。だが、それならば

…全員仕留めればいい話だ。

死神はある時の事^{▲R 小隊との戦闘}以上のピンチにほくそ笑んでいた

Number of Nine

崩れた建物を挟みお互いの視線が交差する

死神は数的不利をカバーするため身体の損害に目もくれずグリフィンの部隊と交戦を行なつていた。

接近戦を仕掛けてくるのはこいつだけか…。

QBで裏を取ろうがミサイルで弾幕を張ろうがただ食らいついてくるナインと呼ばれていた人形

「あなたみたいな強い鉄血の人形は初めてみたよ」

そう言いながら左手に持った自身の銃で射撃を行う

他の人形達も射撃を行なつてゐるが、二人の戦闘速度とナインへの誤射を恐れ散発的な射撃となつていた

「あとどれくらい持つのかな？」

小さく笑いながら死神の攻撃を避ける

…。一か八か、か。

死神は先程ブレードによる攻撃を狙つた時のようにミサイルを撃ち連続QBを行う。

ナインは死神のミサイルの弾幕によつて張られた煙に紛れる。死神はブレードを構えたまま煙へと突撃する。振り抜かず、アサルトアーマー。減衰しているため大きな爆発ではないが戦術人形を破壊するには十分すぎる一撃が、緑の閃光が煌めく煙が晴れる。残骸と変わらない戦術人形が膝を折っていた。

…。おかしい。

ここで違和感に気が付く先程までの援護が無い事に

…ツ！

迫る影。完全に気配を消した奇襲

「残念だね～それダメなんだ～」

ブレードで奇襲を防ぐが威力を殺しきれずブレードが折れ、左腕がひしやげる。そして追い打ちに榴弾が直撃

がツ：！

死神は膝を折った

「ほーんと頑丈だね。そろそろお別れにする？」

にこにこと笑みを浮かべながら杭を装填するナイン
「今度こそ…さようなら！」

杭が迫る

「そこまでしてくれないか？」

怒気を含んだ声と共に当たる筈だった攻撃は甲高い金属に変わった
来たか、ウロボロス。

死神は悪びれず何でもないかのように話す

「おぬしは黙つて立て。まだ動けるのだろう？・さつさと帰るぞ」

損害率70%だがまだ問題ない。

よろよろと立ち上がりライフルを構える

「あーあ残念。増援かあ：そろそろ時間押してきてるし痛み分けつて事で帰してくれる
？お互い生きてるしノーカウントでしょノーカウント♪」

杭を装填しながらナインは話す

「おぬしは人を馬鹿にしてるのか？」

「アハハハハ!!!予定変更！時間ギリギリまで相手してあげるね!!」

ナインがウロボロスへ飛び掛かるそれを死神がライフルで迎撃する。体勢が崩れた
所にウロボロスがミサイルを放つが別の場所から撃たれた銃弾に全て撃ち落とされる。
お互い決定打を与えられず膠着状態が続く

突如ナインは動きを止めた

「時間みたい。そろそろ帰るね」

「そんな事させるとでも思つてゐるのか!?」

ウロボロスはナインへとミサイルを放ちながら殴りかかる

またしてもミサイルは全て叩き落とされる。ウロボロスの拳はナインの左手で弾かれて体勢を大きく崩した所に蹴りを入れられる

「うがつ!?

死神もライフルを撃つがダメージにより狙いが定まらず大きく外す事になつた

「じゃあね、楽しかったよ〜」

カンと音と共に閃光と轟音が鳴り響く

二人の視界と聴覚が戻る頃には夜明け前の空と冷たく吹き付ける風が残るだけだつた：

閑話休題 新年へと向かつて

「オイ、ファンタズマ。おぬしも手伝え」

窓から外を眺めていた死神は頭を軽く叩かれ振り向く
何をすればいい。

「うーん、なら窓拭きでも頼む。整理なんて頼んだら全て捨てられそうだからな」

小さく笑いながらウロボロスは死神に雑巾と洗剤を渡す

「グリフィンの連中への攻撃もしないといけないがそろそろ年の瀬だ。新年も頑張つて
グリフィンの連中を叩き潰せるように掃除しないとだ」

⋮。

死神は黙々と窓を拭き、ウロボロスは淡々と喋りながら掃除を続ける
なんともないいつもの光景だ

「そうだ。今日は鍋を食べるそしだがおぬしはどうする?」

どうせ断つても連れて行くのだろう?

「むつ⋯⋯。それなら命令として言うぞ。おぬしも一緒について来い!」

ビシツと指を指す

ああ、わかつた。

いつもの調子で死神は答え、掃除に戻つた

「えつと…たしか、この部屋だな」

ウロボロスが扉をノックすると中から代理人が現れる

「あら、こんばんわ。あなた達も来たのですね」

「どうせ暇だつたからな、では入るぞ」

ウロボロスに続いて死神も部屋へと入る。奥からはガヤガヤと喧騒が聞こえる
「もう始まつているのか？」

「いいえ、先にお酒を飲み始めて騒いでいるだけですよ」

そんな会話をしながら奥へと進む

「ん?なんだウロボロスとファンタズマか」

既に出来上がつているようにしか見えない処刑人が酒瓶を片手に話し掛けてくる

「よおし!ウロボロス、ファンタズマ!一杯飲め!」

「うおつ!?酒臭ツ!」

「面倒な上司ムードはやめろ!?

ずいっと酒の入ったコップを渡されウロボロスは渋々といった顔で口を付ける
続けて死神も一口飲みふむ。と言い思案した顔になる

「おい、おぬしこういうの大丈夫なのか?」

特に問題は感じない。感覚的に酔うとというモノは分かつた。

死神は表情を変えずにコップを満たす透明な液体を見つめる

「よし!ファンタズマイックだ!イッキ!」

そんな事を言う処刑人の頭に鋭い手刀が振り下ろされる

「処刑人そろそろいい加減にしたらどうだ?二人とも困つてるとぞ」

「ハンターか、助かつた!」

「痛えじやねえかよハンター!」

「はいはい、絡み酒は程々な」

そのままハンターに引っ張られて行く処刑人であつた

「中々美味しかつたな。おぬしはどうだつた?」

中の喧騒から離れた外のテラスに二人は居た

悪くはなかつた。

「おぬしもたまには戦う事を考えずにみんなでワイワイやるべきだと思うぞ」
「そうかも、それないな…。」

「えつ？ おぬしが戦いの事以外の事考えるはちょっと氣味が悪いぞ」

心外だな。

死神は顔をしかめる

「いや、すまんすまん。ハハハ」

わざとらしく笑いながら肩を叩くがすぐさま真面目な顔に戻り呟き始める

「なんだかんだあつたがおぬしの事は信頼してる」

どうした藪から棒に。お前らしくないな。

「たまにはいいだろ？ まあ、そのお…なんだ…、来年もその…よろしく頼むぞ。面と向
かつて言うとなんだか恥ずかしいな」

「ああ、そうだな。こちらこそよろしく頼む。

「そろそろ冷える。中に入るとしよう」

そして二人はまた喧騒の中は戻つて行くのであつた

火蓋

「デストロイヤー!!さつさとさがりなさい!!」

怒号が響く

「うるさい!!よくも私のダミーを!」

自身スレスレに飛んでくる銃弾を氣にも止めずデストロイヤーは手に持つ大きなグレネードランチャ―をぶつ放す

「ああ！もう！そんなんだからあんたはいつまでもお馬鹿さんなのよ！ファンタズマ！援護するからそのお馬鹿さんを連れて下がつて！」

了解した。

「あつ！ちよつと！ドリーマー！なにすんねん…」

死神の姿を見たデストロイヤーは一瞬にして黙り込む。さつきの威勢は何処へやらだ

下がるぞ。

「イノチダケハ…」とブツブツ呴いているが死神は特に気にする事もなくデストロイヤーの首根っこを掴みドリーマーの元へ合流する

「この吹雪よ。あいつらもそこまで深追いはしないはず」

ドリーマーのダミーも射撃を止め僅かに残つた下級兵と共に後退を始める

敵の射撃は未だ続いているが、追つてくる様子は無く数分後に無事に後退する事が出来たのだつた

「アーキテクト、報告よ。グリフィンの連中への損害はあるけどこちらの方が大きいわね。AR小隊だけだったら簡単だつたかもしけないけど増援の部隊と合流されちゃどうしようもないわ」

ドリーマーは不機嫌な顔をしてアーキテクトへと報告を行う。ドリーマーの隣にはションボリとした様子のデストロイヤーと特に変わつた様子もない死神が立つてゐる
「うーん。どうしようかな。迎え撃つくらいしかなさそうだし…。そうだ！折角だしアレを試しちゃわない？」

「その武器どう見ても私やこのお馬鹿さんでは使えないモノじゃない？」
「そうだよ。最初からファンタズマに使つてもらう予定で作つたし！」
「変なモノを作るんだな。

「変なモノ!? 失敬な! このアーキテクトちゃんの自信作なんだから! グリフィンの連中も度肝を抜くに違いないよ!」

「あんなまともとは言えないモノを作つて喜ぶのね、変態よ」

「ほんと、そうだねドリーマー」

「ここにいるアーキテクト以外の3人の考えはほぼ一緒のようだつた

――――――――――――

「もう少しですね姉さん」

「そうだな、M4。あの施設さえ押さえられればジュピターの攻撃を受ける心配もないだろうな」

全員少なくとも損傷を負っているが誰一人とて戦意は欠けていなかつた

「それにあいつが。あの『死神』が居た。AR-15を傷つけたあいつは絶対に殺さないと」

SOPMOD2が人一倍殺意の籠つた声で話す

「そうね」

A R — 15 は呟く

(以前のようにはいかない今は皆がいる。今回は必ず……！)
その瞳に恐怖は無く、ただ決意に満ちていた

狼煙

火を噴くジュピターと人形達。しかしジュピターは強力な主砲ではなく機銃による射撃しか行えずグリフィンの人形達の進行を遅らせるだけに留めていた。一つ、また一つとライフルの狙撃によつて鉄屑へと変わっていく。待ち構えていた筈がジリ貧になつてゐる

「あわわわわ……どうしようジュピターがあ……」

アーキテクトが悲壮な声を上げる

「ファンタズマ――まだ撃てないの!?」

準備はできてるぞ。

「じゃあ早く撃つてよ!!!」

アーキテクトが叫ぶ

了解した。

そう言うと死神は狙いを定めた

「固定砲台も粗方破壊したしこれなら行けるんじやない？どうなの隊長さん」

ライフル人形が意見する

「どうするM4…？」

「…。皆さん、確実に残ったジュピターと狙撃兵を倒しながら近づきましょう」

M4がそう提案するが増援部隊のSMG人形が意見する

「もう相手の抵抗は薄くなってるじやない。立て直される前に仕掛けるべきよ！」
一部の人形達もそれに賛同を始める

「その通りだよ！」

「ここで押し切れば勝てる！」

「隊長さん！悪いけど私達は進行するわ！こんな戦い方は性に合わない！」

SMG人形がM4に詰め寄る

「ま、待つて下さい」

M4の静止に耳を貸さず自身の部隊に指示を出して飛び出していく。

イエーガーやヴェスピードの射撃が飛んでくるが吹雪で視認が難しい今その弾は的外
れな所に飛んでくるだけであつた

「所詮は鉄屑つてわけね」

笑いながら鉄血の陣地へと突撃するSMG人形達。しかし彼女達は不運であつた、吹雪が弱まり鉄血の陣地がはつきりと視認できた。ナニかが居る。

青い光と轟音が鳴り響く

M4達は一瞬何が起つたのかを理解出来ずにいた

答えは簡単だ射線上に居た3体が上半身を消し飛ばされ擬似血液を撒き散らしながら倒れた

SMG人形と共に突撃をしていつた人形が青ざめ悲鳴を上げへたり込む

狼狽た隙を狙われてイエーガーに撃ち抜かれた

「スマートク!!」

M16が叫びハツと我に帰つた人形達がスマートクを投げライフル人形達が援護射撃を展開した

「ファンタズマ、着弾確認したわよ、3体に命中したわ」
了解した。冷却の為一時中断する。

アーキテクトから声が掛かる

「ねえねえ！どうだつた！」

先程焦つていたのが嘘のように彼女は無邪気に聞いてくる
やはり冷却はネックだ。今回は他と連携をしての使用だが一人で使う事を考えると
次弾発射までの時間が長い。

「うんうん。OK！そちら辺はなんとかするね！」

アーキテクトがメモを取りながら頷く

「よし！そろそろ次行つてみよ！」

了解した。

吹雪がまた弱まり始める。

まだ狼煙は上がつたばかりだ

激突

銃声が、轟音が、怒声が、金属音が鳴り響き耳を裂く。死神が放つたオーバードウェポン、ヒュージキヤノンの一撃は最初の1発以降大きな効果を得ることは出来ていなかつた。

固定砲台であつたのもさつきまでの事、4発目の発射後にヒュージキヤノンの銃口へと徹甲弾を撃ち込まれ鉄屑と化したのだ
アーキテクトはデータがなんだの嘆いていたが死神には関係ない。素早くいつもの装備へと換装し交戦を待つてゐる

さつきの一撃、この腕は以前のスナイパーだろうな…。
再戦を望む彼に取つてはこれほどの喜びは無いのだろう

（それには、AR小隊。やつらとの戦いもか…）

不敵に笑う死神。激突の時はすぐそこまで來ていた

「姉さん、あの砲台もジュピターも全滅しましたね」「ああ、これなら近付ける」

M4は頷く

「ライフルの皆さん、引き続き援護射撃をお願いします。ここをえ奪取できれば基地へ通信を行えます。油断せず、いきましょう！」

残る部隊からの了解！の声

M4達は吹雪の向こうにある目標を見つめ進む

散開しじりじりと詰め寄るAR小隊達

「敵の姿が見えないわね：やつらはもう逃げたのかしら…？」

AR-15は訝しげに呟く

そんな訳はないだろう？

AR-15の言葉に静かな声が返される

全員が声の方向へと銃を構えた

吹雪く中から黒い影が、あの忌まわしい死神が現れる
また会えたな。それでは始めよう。

死神は笑いブレードを振り下ろすがライフル人形が的確に腕を撃ち、弾く隙を晒した死神の身体に多数の銃弾が飛び込むがPAがそれを阻むしかし死神が攻撃を行おうとする度にライフルの弾がそれを邪魔をする…そろそろPAが限界か。

ドヒヤア！と音と共に地面の雪を巻き上げて姿を掻き消す

アサルトアーマーの発動を発動準備をしながらライフル人形の背後へと素早く回り込む

「そう来ると思つてたわ」

銃口から徹甲弾が飛び出す

至近弾を受け死神は吹き飛ぶ、同時にPAが完全に減衰し効果を失つたやはりお前だつたかあの時のスナイパー…。フフフ…。
W A²₀。体勢を立て直しました地面の雪を巻き上げ姿を消す

「さつきは見失なつたけどもう逃がさないわ」

ARの小隊の一斉射撃

QBにて無理矢理に避けるが被弾が重なる

AR小隊達も死神の反撃によりダミーを倒される
ンフフフ…。良い、とても楽しいな。

死神は笑いながら正確な狙いでダミーを仕留める

「あんた、やつぱり狂ってるわね。自分の命を投げ打つような真似のどこが良いのよ」
それの何が悪い？

言葉など不要、そう示すかのようにお互いの銃口から火が吹き銃弾が交差した

「ツ！」

「ど、ドリーマー大丈夫！？」

「問題ないから黙つて撃ちなさい！」

ヴエスピード達が一体、また一体と倒れてゆく

「ああ！クソッ！グリフィンのクズ人形の分際で！」

「もう撤退するべきかもね！」

アーキテクトがロケットを発射するが遮蔽物に防がれて相手の射撃をほんの少し中断させるだけにしかならない

「ここまで来てむざむざ逃げるって言うの!?」

「でもここで死んじゃったら新しい義体で帰ってくるまでどれだけ掛かるか分からぬ

んだよ！アーキテクトの言う通り撤退すべきだよ！」

「…。」

ドリーマーは悔しげな顔でグリフィンの人形達を睨み付ける

「そうとなつたら全力で逃げよう！デストロイヤー、今通信を入れるからファンタズマの援護へ行つて！」

「う、うん！わかつた！」

一瞬だけうつ……とした顔になるがすぐさま移動を開始し全力で走り出した

『ファンタズマ！聞こえる！？撤退だよ！デストロイヤーをそつちに向かわせるから下がつて！』

ああ、聞こえている。残念だかその命令には従えない。

『ちよつと！？どうして！？ま、まさか楽しいからとか言うんじゃないよね！？』

アーキテクトの焦り声が聞こえる

そうだが？

『もう！なにがあつたらウロボロスにどやされるのは私達なんだし、ファンタズマはバツクアップが取れてないんだからダメだよ！ダメ!!』

死神は面倒臭そうな顔し溜息を吐くと不満げに分かつた。と答え通信を切り遮蔽物へと身を隠す

「ファンタズマー！撤退だよ！撤退ー！」

デストロイヤーが死神の横へと飛び込んでくる

ああ、分かつてゐる……。

不機嫌そうな声を漏らし射撃を行う

デストロイヤーは少しだけビクツとしてお、怒つてゐるのかな……と小声で呟く。若干涙目であつた

おい、デストロイヤー。目一杯に連射しろ当てなくともいい。

「う、うん。」

一斉射撃、大量のグレネードランチャー弾が空を飛び、地面を抉る

撃ちきつたのを確認した死神はデストロイヤーを脇に抱えたかと思うとO Bで飛び出し、Q Bを連続で行う

「?!?!」

突然の出来事にデストロイヤーは反応出来ずO BとQ Bの衝撃を身に受けることになつた

ズザーツと音を立てアーキテクトの近くに着地しデストロイヤーを降す
デストロイヤーはフラフラと歩いてよろける

「おかえりデストロイヤー、結構早かつたじやない」

そのまま地面に手を突き口から虹を吐くデストロイヤーの背中をさすりながらド
リーマーはニヤニヤとした顔で話しかける

「ファンタズマもデストロイヤーも戻つて来たね！よし、逃げよう！」

「そうね。デストロイヤー立てるの？」

「うん、ありがとうドリーマー…。」

フラフラと真っ青になつた顔で立ち上がるデストロイヤー。半泣きになつていて

「取り敢えず言い出しつへは私だし殿はこつちで引き受けるから早く逃げてね！」

アーキテクトは射撃を続けながら答える
了解した。

死神は頷き歩き出す

デストロイヤー達もそれに続いて慌てて着いていく

「アーキテクトー！絶対帰つて来てよー！」

「わかつてー！大丈夫だから安心してよデストロイヤーー！」

そして声は爆発音でかき消された

終点

結局アーキテクトは戻つてくる事はなく前回の作戦から約数週間が経過していた
グリフィンとの戦闘は更に激化し、損害が増すばかりであつた
多くの鉄血の基地は制圧され前線の後退を余儀なくされていた…

「やあ、Jまた会えたね。元気にしてるみたいで安心したよ」

：今度は何をしに来た？

「ここ最近は負け続きだつたんでしょ？そんなキミへのプレゼントとしてデータベース
にプレゼントを送つておいた。楽しみしてくれよ」

ハハハと財団は笑う

どうせ、碌なモノでは無いんだろう？

「見てからのお楽しみさ、ワクワクするだろ」

死神が口を開く前に財団はニタニタと笑いながら言つた

「J、仲間を失うのは辛いかい？かつて自分の部隊を失った時のキミは何も感じて無かつただろう？今のその身体ではどう感じてるんだろうと思つただけだよ」

私は戦うだけだ。他の連中の死など関係ない

「そうかい。ボクはいつでも見てるよ、じゃあね」

財団の姿と視界は歪んで、途切れたり

―――

遠くから声が聞こえる。OSがメインシステムの起動をし意識を覚醒させる

「メンテナンスは終わりましたよ。特に異常はありませんでした。それと外部装甲の修理、武器の調整等も完了しています。」

メンテナンスルームの人形がコンソールを弄りながら話す

データベースに何か届いてないか？

「データベースですか？特に何もないと…え！？あ、ああ失礼しました。専用装備のデータが届いてますね…。ただ、ここでは作成等は行えませんのでこちらの基地で作成と受け取りを」

了解した。

データベースにあつた資料を読みながら部屋を戻ってきた。どうやらウロボロスは居ないようだ。書き置きがあつた
飯はちゃんと食べるんだぞ！——ウロボロス

⋮

何を言つてるんだコイツはと顔をしかめながら書き置きをポイと元の場所へ投げ捨て出発の準備を始める

わざとぼかして書かれているが取りに行くまで何かわからないのも面倒なものだな
⋮

ため息をつき味気のないエネルギーバーを齧り水を流し込む。ウロボロスの前でや
ると「ええい、そんな不味いモノの食べるな！もつと美味しいモノはあるだろ!?」と喚か
れてうるさいので普段は食べないようにしている

食べられればなんでもいいのだがな⋮。

まあいいと呟いて部屋を出る他の連中には伝えてある数日程度なんの問題もないだ

ろう

未だ戦闘が続く区域防戦一方の鉄血は徐々に後退させられていた

「あ、この前のハイエンドの人形だよね？また会ったね！」

この地獄の様な戦場ではあり得ないくらいの底抜けに明るい声が聞こえた。背筋に
冷たいものが走る。死の気配だ

「…最悪だな…。この前は見逃してやつたのだ。今度はこちらを見逃して貰えないか
？」

冷や汗を流す。逃げられない事は分かっているのだ。ただ恐ろしい。本能的な恐ろ
しさが全身を襲う

「んふふ、返してあげてもいいよ。私達を倒せるならね」

そうしてこの区域最後の戦いは始まつた…

遺言

「これで終わりだ……」

襲いかかってきたUMP9だった残骸を投げ捨てる
満身創痍、引き連れていた人形はほぼほぼ全滅

「他の連中が来る前に離脱しなければな……」

付近の人形達へ撤退命令を出す為に通信を開始する

「もう帰っちゃうの？」

ウロボロスは血の気が冷める感覚と共に振り向く。そこには先程倒したはずのUMP9が居た

「は？ど、どうして貴様が」

「これ、私のダミーなんだーよく出来てるよね」

自分のダミーの残骸をつつきながらUMP9は答える

「コストが高いらしくて試験がてら回してもらつんだよね。そちら辺の鉄血人形には負けるはずなんてないから故障か何かかと思つて見に来てみたんだよー」

ウロボロスは次の一手を考える。どうすれば逃げ切れるかを

「それはそうとまた会えたね！今日はお友達は居ないみたいだけど！」

大袈裟なポーズを取るUMP9にウロボロスは自身の武装を撃ち込む
「遅いかな」

「な、」

一瞬にして背後に回り込んだUMP9に反応する事がやつとだつた。左腕のパイル
バンカーが迫る。

衝撃と共に意識が途切れる

瓦礫の山に叩きつけられた事によつて途切れた意識が戻る

エラー、深刻なダメージが発生している

コアは半分風穴が空いたようだ

ゲホゲホと擬似血液を吐きながら自身の装備の残骸を杖代わりに立ち上がる
「あちやーちょっとやりすぎちゃつたかな？」

向こうから声が聞こえる

「どんなん、吹っ飛び方を、したんだ…私は…」

おそらく派手に宙にでも舞つたのだろう

しかし、コレはチャンスだ。今しか逃げるチャンスはない

「なんとか、して、逃げ、なければ」

半分壊れた自身の身体に命令を下しできる限り素早く残骸と瓦礫の山を、その隙間を進んで行く

脚への命令が効かなくなつた。それでも這つて進む

——帰らなければ

しかし現実とは残酷だ、半壊したコアでは限界が近いのだろう腕すらも満足に動かなくなつてきた

「もう、ダメそうだな…」

ふと目をやると偵察用に放つておいたダイナーゲートが居た。逃げ遅れたのだろう瓦礫の隙間に縮こまつっていた

「こつちへ、来い。アソッソ、ファンタズマに、伝えなければ、な」

命令を下せばすんなりこつちにやつて来る

音声データをダイナーゲートに送る

「さあ、行け。絶対に、届けてくれ…。」

瓦礫と瓦礫の隙間を抜けて消えるダイナーゲートを見送る

「あー、こんなところに居たんだ！ もー探したんだよー？ でもそんな身体で逃げれる訳ないでしょ？」

UMP9は笑つていた

「おーい聞こえてる?」

まあいつかと言ひながらUMP9はウロボロスのコアへとどめの一撃を叩き込んだ
後には少女の上機嫌な鼻歌が響いていた

約束

死神は専用装備の作成と受け取りを行うため後方の基地へと来ていた
想定よりも完成が遅かつた”それ”を見て死神は唸つた

これは…

「グリフィンの技術の応用です。奴等もここ最近になつて投入を始めたようです。我々
の作つたモノはまだプロタイプの域を出ません」

リンクを接続して使うのだろう?

「ええ、ですがプロトタイプです。グリフィンのように完全自律とはいきません。ド
ローンの操作のようなものです。」

これ以上は望めないか?

「無理ですね。つい先日送られてきた送り主不明のデータが無ければ完成どころか基礎
の部分ですら出来ていなかつたでしょうね。今や我々は劣勢に立たされつつあります。
使えるものは使わなければ——」

死神は用意されていた個室で端末を眺めていると扉に何かが当たる音が聞こえた
…?

死神が扉を開けるとボロボロのダイナゲートがキイキイと音を立てていた
気づけば端末に何かが送信されていた。送信が終わると同時にダイナゲートは機能
を停止したようだつた

いつたいこのデータは…?

『よう、ファンタズマ生きてるか?まあおぬしがそう簡単に死ぬ訳がないだろうがな!』
ハハハ!と笑う声が流れる

『……これは記録音声だ。私はもう帰れない、だから残った私の全てを使つてこれを記
録したんだ。こういう時人形だと楽で良いな…。おぬしは覚えているか、初めて会つ
た日の事を…あの日から私は助けてられたしおぬしを助けた。あの高速飛行だけはも
う勘弁してほしいのだがな…。……まだこんな所で終わりたくないのだがな…私ら
しくないな、ハハハ…。ファンタズマ、おぬしが私の代わりにこの先を見てくれ…成就
しろよ、おぬしの願いを…』

ぶつりと音声が切れ、音声ログ再生終了と機械的なガイド音がすつと現実へと引き戻
す

無意識のうちに力を込めた事によりヒビの入った端末を持つたまま立ち尽くして いた

炎が舞い銃弾が飛び交う。硝煙の匂いが、生体パーツの焦げる匂いが辺りを包む

「さすが鉄血の本拠地。でも”あいつ”が居ないわ」

特徴的なライフルを持った人形——WA2000——が呟いた

「これだけ叩いて出てこないのは変だよね……」

「まあ考へても仕方ないわ、目標のエルダー・ブレインを探しましょ」

そう言つてWA2000達は次のポイントへ向けて進みだした

襲撃部隊の殆どが再集合し最後の指定ポイントへ歩を進める

「……」で最後です。全員気を引き締めてください

隊長のM4がそう言ひながら扉に付けた爆破装置を起爆させる
爆発音と扉がひしやげる音が響き煙が徐々に晴れていく

「ようこそ、グリフィンの皆様。今回の襲撃見事ですわ。私代理人——エージェント——があなた方のおもてなしをさせて頂きますわ。さあ始めましょう。殺しますあなたを」代理人が綺麗な一礼をし武器を構えた

落日

狭い室内の中で始まつた銃撃戦はあっさりと決着がついた

エージェントのスカートの中に収まつていた武器が火を吹くのに合わせてSGの人形や障壁を張ることができるSMGの人形が前へ飛び出る。

M4の「撃て！」という号令と共に射線が被らない人形により一斉に掃射され鉛の雨は代理人に打ちつけられた

——止め。

今度はM4の号令と共に射撃の音が鳴り止む

こちらの損失は無し。数名が軽微な損傷を負つたのみであつた

部屋を包んだ硝煙が晴れると循環液が地面を染めフレームが剥き出しになつた満身創痍の代理人が膝を付いていた

「エルダーブレインはどこですか？」

M4の冷たい声が響く

「……さあどこでしようね」

酷くノイズの走つた声が吐き出される

カツン。一步、代理人の前に歩を進める

「エルダーブレインは、どこですか?」

冷たい目が代理人を射抜く

「……。」

数瞬の間沈黙に包まれた

はあ。とM4の溜息が漏れるのと同時に代理人がナイフをM4の喉元へと突き立て
ようと動く

「無駄な抵抗ですね」

損傷により動きが鈍くなつた代理人の攻撃を難なく払うと首を締め上げる
「あなたに脊髄なんて必要ですか?」

そのまま代理人の首を捻じ曲げる。ノイズが激しくなり途切れ途切れになる意識の中誰にも聞き取れないノイズ混じり声で呟く

(これで良かつたの、です、わエリザさ、ま。ご ぶ、じ で……)
ばしゃりと循環液の海に沈んだ

「エージェント、苦労だつた……。」

暗闇の中から声と共に人影が現れる

人形たちは一斉に銃を構えた

「待て、私に交戦の意思は無い」

両手を挙げその場に立ち止まる

「あなたがエルダーブレインですか？」

「そうだ」

「今すぐに鉄血の全部隊の機能を停止しなさい」

「それは：出来ない」

「そうですか。とM4は構えていた銃をエルダーブレインに突き付け

「止めろ」

恐ろしく冷たい声音を放つ

「…財団」

「は？」

「全ての元凶は財団を名乗る男だ」

「話そう。この事件の真相を」

「…真相、ですか。あなたが原因ではない。そうですか？」

エルダーブレイン——エリザはそうだ。と答える

「全てお父さんが死に際に私に送った情報だ。あの日『取引』と財団は称してやつてき

た。自身の手に持つ全てを持つて交渉しにきた。上層部やお父さんは断つた。それらは全て人を滅ぼしかねないものだつた。

マンティコアをゆうに超える化物。

周りの損害するも考えない兵器。

そして大地を汚す粒子…。」

M 4達はエリザの出した情報と死神と戦った記憶を照らし合わせ合点がいつたかのように頷きエリザへ話の続きを促した

「財団は最初から交渉する気なんて無かつた。管理プログラムにウイルスを流し鉄血の殆どの指揮権を命令権を奪つた。

…私はただの中継役に過ぎない。財団の出した命令は私を通して下される…。」

「あなたを殺しても意味がないと？」

エリザはM 4の問いにそうだ。と答えた

「だが、管理プログラムへのアクセス権限はある。プログラムに直接命令を与えれば財団の命令を停止できる」

エリザが話を終えるとM 4は口を開いた

「あなたには来てもらいます。この戦いを終わらせる為に。」

審判

ただ戦うために

ただ死ぬために

もつと戦火を、もつと戦果を

この身が焼き切れるまで闘いを

瓦礫の山、残骸の群れ、焦げた香り、硝煙の風が吹く

⋮。

炎が舞う惨劇の後に死神はまだ佇んでいた。まさしく最後の戦いに挑まんとする重武装と装甲だった。

数刻、遙か彼方を眺め終えるとVOBは爆炎と轟音を響かせ死神と共に地平線へ、最後の戦場へと飛んで行つた。

|||||

—

「死神がやつてくる」

エリザがポツリと言葉を溢した

それと同時に部隊長であるM4に観測のSR人形から敵影の接近が伝えられた
「来ましたか。全部隊に通達、交戦を開始してください。ここで仕留めます」

徹甲弾の雨が降る

迫る弾丸を強固な装甲で弾きながら死神は迫る

使用限界を迎えたVOBをページするとその勢いのまま狙撃ポイントの建物に体当
たりをした

各隊からの通信を聞きM4は舌打ちをする

悲鳴と怒号が通信越しに聞こえると同時にブツリと途切れた

「AR小隊総員へ、我々も向かいましょう」

「た、たすけて…」

たつた数瞬で部隊が壊滅した。信じられなかつた。

仲間だつた者達の循環液で全身を真紅に染めた目の前の鉄血は間違ひなく死神だつた：

「こないで！」

護身用のハンドガンは無常にも装甲に弾かれて意味をなさない

砂煙が晴れず援護射撃すら来ない

「鉄血の姿は!?」

MGの人形が叫びその返答に 見えない。と返つてくる

「いいから探して！」

MGの人形がそう返した時、煙の壁の向こうから青白い光が迸つた。

使用限界か：ページする。

大量の棒が付いた大きな装甲のような物をゴトリと落とす
瓦礫も残骸も人形だつたモノも融解し崩れて転がつてゐる

オーバードウェポン、マルチプルパルスによる計130門のパルスキヤノンの一斉掃

射。鉄血の技術によつて不完全ながら再現されたそれは強烈な閃光と共に死を振り撒いた

一つ息を整え次の武器を構える

巨大な筒を右手に、フジツボのような凹凸のついた装甲を左肩に構える

オーバードウェポン、ヒュージブレードは次の瞬間に超高出力の火炎を噴き出した

救援に駆けつけた人形達は死神の姿を捉えると同時に絶望した。全てを焼き尽くさんとする火炎の刃から逃れられないと無慈悲にも高性能な演算が答えを導き出した

「そこまでだよ！」

声と共に死神の右腕に走る強烈な衝撃

轟音が弾けヒュージブレードの軌道が逸らされた。が死神も即座に反応をする。逸れたそヒュージブレードれを自身の膂力にモノを言わせて振りかぶった

「416！」

目の前の人形がそう叫ぶと自身との間に何かが落ち：弾けた

目の前にいた人形、UMP9は一瞬にして姿を消し同時に死角からの銃撃を受ける事になつた

先程の衝撃を左肩に受けエラーの信号が鳴り響く、同時に碎けた左肩の装甲に正確な

射撃を浴びた

左肩が動かなくなつた、か

頭部装甲の下で口角を上げた死神が愉快そうに呟くとヒュージブレードの出力を最大にまで上げ地面へと突き刺した

熱波と砂煙が舞う。射撃は止まない、だが：

薄煙の向こう側で金属がひしやげる音が、何かが地面を削りながら回転する音、それに伴う轟音が響く

「416！ 避けて！」

先程とは別の声が叫んだ時ドリルのように回転するブレードを構えた死神が飛び出し先程まで416の居た建物を粉々に砕き塵にした
「分かつてるわよ。私は完璧なんだから」

416は銃を構えグレネードランチャーを放つ

「じゃあ私も！ もういいばーっ！」

反動で硬直した死神の背面の装甲に弾頭が直撃し剥がれた装甲を縫つてパイルバンカーが叩きつけられた

コアは損傷、全ての武装は損壊。まだ、まだ終わつてはいない

自身が衝撃で吹き飛ばされた事に気付き瓦礫の山から身を起こす。
全身から火花が散り、循環液が地面を染める。

だが、碎けた装甲の隙間から覗く顔は戦いを純粹に楽しむ者の顔をしていて
メキメキと音を立て巨大な瓦礫を持ち上げる。それと同時に人形達が驚愕の声を上
げた

「デタラメ過ぎるわよ、コイツ…」

416は忌々しげに呟きながらアンダーバレルに付けられたグレネードランチャー
をリロードし、銃口を死神へと向け放つ

それと同時に他の人形達も一斉に引き金を引いた
マズルフラッシュが輝き弾丸が死神を貫く、しかし止まらない。死に体とは思えない
膂力で巨大な瓦礫の塊を振り抜き叩きつけるがコアの損傷と度重なるダメージが死神

の動きを緩慢にしていた

自身に必殺の一撃を放たんとするUMP9に標的を定め振り抜いた攻撃はいとも簡単に避けられた

「最期の一呼吸が終わるまで」

正確無比な416の弾丸が右肩の装甲を貫き剥がしそれを追うようにG11の弾丸が関節を碎いた

「チエツクメイトよ」

UMP45は自身の銃の引き金を引き剥き出しのコアへと弾丸を叩き込む

「ナイン！」

「まつかせてよ45姉！」

次の瞬間には重い金属音が響き、それと同時に死神が膝から崩れ落ちた

「らくしょーう！」

UMP9は高らかにVサインを掲げた

V e r d i c t D a y

メインシステム戦闘モード、起動。

死神は闇のようないい黒の装甲を身につけた軀体を起こす

グリフィンのダミーリングシステムを応用した遠隔操作。奴らの力量は見た。雑兵

を蹴散らし『候補』になり得る者達は残つた

満足気に鼻を鳴らすと同時に財団の声が聞こえた

「J 肩慣らしは終わつたかい？」

十分だ。

「それじやあ始めよう。そして教えてあげなよ、彼女たちに可能性なんて無いんだって事をね！ハハハ！」

死神はこれから起ころる戦いに武者震いをし飛び立つた

|||||

「遅れて来たところ悪いけど大した事なかつたわよ」

UMP45が肩を竦めながらM4達に振り返った

「ほんとにこんなのに苦戦したの？私達だけでも充分だつたけど？」

「ええ、コイツのせいで私達の部隊は半壊しかけました。』

M4は死神の残骸にチラリと目を向ける。違和感。何かは分からぬが小さな違和感を感じ「…本当にソレは、あの時の死神なんですか？」

「ええ、反応も前に確認した時と同じだつたわよ」

「コアは？」

「そこまで疑うの？まあ、待ちなさいよ、今確認するわ」

M4達は残骸へと向かい歩き出した所でエリザからの通信が突如として響く

『そいつは違う！ダミーだ!!ファンタズマが来る!!構えろ!!』

皆、空を見上げた黒い怪物が、黒き審判者が、緑色の輝きを放ちながら舞い降りた
「昔話をあげるよ。これは僕たちが候補者を殺していく頃の話だ。

僕たちは人類を否定していた。可能性なんてない、とね。

僕たちは考えた。

人類はなぜ無駄に足搔くのかって。

でも自称管理者共は、人類に可能性を見出そうとしたんだよ。

だから、候補者を見つけ出して、殺すことにしたのさ。

なにもかもを黒く焼き尽くす、死を告げる鳥。

そんな『黒い鳥』なんて眉唾だつて妄言だつて否定してやろうとしたのさ！」

別の男の声がそう狂気的に言い終えると死神は俯いた頭を上げる。

赤い光がギラギラと光る

未だ降り止まない雨のような絶望を、お前達の手で殺してみせろ。

「撃て!!!」

M 4 の怒号が響くと同時に A R 小隊のメンバーが一斉に砲火した。それに続くように MG の人形が、SMG の人形が、RF の人形が HG の人形が、恐怖を押し殺すように一心不乱に引き金を引いた

死神は踊るように、建物の間からその間へとライフルを撃ちながら滑るように消えては現れる。その度に人形達への被弾が増えしていく

「早く起こして下さい！あなた達の切り札なんでしょう！」

M 4 が焦燥した声で U M P 4 5 へと怒鳴る

「やつてる！ぶつ飛ばされた時に頭打つてみたいただから再起動には時間掛かるわよ

!

M4は舌打ちをすると移動の命令をしていたRFの別動隊へと指示を出す
——

「M4からの指示が来たわ。総員構えて！…撃て！」

WA2000達は引き金を引いた、放たれた弾丸は死神のPAを貫通し装甲へと突き刺さる

死神の視覚センサーがギロリとスコープの反射光へと向き凄まじい速度で接近を開始した

やはり、今の弾はお前か…この時を待ち望んでいたぞスナイパー！

撃て！ともう一度指示が飛ぶ今度はWA2000以外の弾は擦りすらしなかつた
放つ、放つ、放つ。銃身が焼けるまでマガジンが最後の弾丸を吐き出すまで。WA2000の弾はその度に死神を貫くが構わずライフルを撃ちながら肉薄する。ようやく他のRF人形の弾が当たる頃にはその多くは倒れ、被弾したWA2000の目の前まで迫つて来ていた

ライフルの銃口は既にWA2000へと向いていた
「さああああせるかつて——の!!」

焼夷手榴弾と自身の得物を構えたスコープオンが死神の頭部へと強烈な飛び蹴りを入れる

「ワルサー！ 退避して！」

焼夷手榴弾を投げ付け銃を撃ちながらスコープオンは叫んだ。

だが死神は燃え上がる炎を振り払いスコープオンを蹴り飛ばした

足を引き摺りながら退避をしようとするWA2000へともう一度銃口を合わせた
WA2000は目を瞑つた。銃声は聞こえない、代わりに重い金属音が響いた

「さつきのお返しだよ」

死神の腹部の装甲へ深々とパイルバンカーが突き刺さっていた

「時間稼ぎありがとう！ あとは私たちがやるよ！」

UMP9がそう言いながらパイルバンカーを引き抜き退避すると同時にスマートクと
フラッシュが焚かれM4の撃て！ という声が響いた

「ワルサー、今うちに、下がろう」

よろよろといつの間にか起き上がってきたスコープオンがWA2000へ肩を貸す
WA2000は悔しそうな顔をしながら分かつたわ。と頷いた

一一一

反応が遅れたか：損傷は想定内だが、あのスナイパーの一撃一撃、その全てが的確な射撃だったようだ…。だが、直ぐの復帰は不可能だろう。先にこの者らを片付けてからでも仕留めるのは容易い

クツクツと笑いながら体勢を整え、射撃を避けるため建物の陰から陰へと移る

死神は着実に追い詰められている、数刻前と同様にだ。しかしそれは相手も同じ事であつた

私が受けている攻撃は全く変わっていない。だが、崩せない。先程よりもより鋭く、私を殺そうとしている。

いいぞ：これこそが鬭争だ！だが！私はまだ死んでいない！私の頭部を砕け！コ
ヘと刃を突き立てろ！雨は、まだ止んではいないぞ！

ハリ！ ハリ！ ハリ！

M4達に追われるよう後退と射撃を繰り返していた死神は自身が誘導されている事に気が付いた。背筋に冷たいものが走り次の瞬間には無意識にPAの出力を全開にしていた

「今」

M 4 が指示を出すと仕掛けでおいたC 4 を一齊に点火した
爆音と共に煙が舞う

「これならあの障壁であつても耐えられる筈がないでしよう」

M 4 はただ呟いた

「それじゃナイン、よろしく」

頃合いを見たUMP 45 が指示を出すとUMP 9 は元気な声で返事を返しながら爆発の中心で膝をつく死神を爆煙ごと貫いた。

UMP 9 がすぐさまに飛び退くと人形達による掃射が始まつた
「J、キミはここで終わるのかい？」

まだだ、本当の終わりは、まだ……！

「なら!!この程度!!想定の範囲内だよ!!!ハハハツ!!!」

起動音が鳴る。

システム、再構築。

戦闘モードを再起動。

「J 行きなよ！これが最後の切り札さ！」

あの時と同じだ。ならば……：

ならば、言葉は既に意味を成さない。な

緑色の粒子が収束する

「總員！物陰へ！」

M4が叫ぶ

煌めき、輝き、そして閃光のように炸裂した

システム、オーバーロード。

警告音が頭の中で鳴り響く、だが、不思議と心地が良い

損壊した武装と装甲を破棄、ページ。そしてブレードを展開する

役目を果たしPAとしての機能を失った緑色の粒子は空に舞い散り煌めいていた
死神が動いた、残る人形の中で最も危険な存在であるUMP9へと標的を定める
捨て身のアサルトアーマーに巻き込まれていた筈のUMP9だが、フラフラとしながら立ち上がり
らも瞳に憎悪を燃やしながら立ち上がり

「よくも45姉を!!!」

パイルバンカーとブレードがぶつかり合う。が直ぐに死神が押し返し蹴りを入れる
うめき声を上げ体勢を崩したUMP9へブレードの切つ先が迫るがすんでの所で4

16にグレネードランチャーを撃たれ阻止される

お互いが爆発により距離が離れたがUMP9は倒れたまま動かない。もう一度狙いを定めた

「させない！」

416が物陰から飛び出し射撃をする

それに合わせるようにM4とSOP2が引き金を引いた

死神は片方のブレードで露出し半壊したコアを庇いながら的を絞らせないよう右へ左へと動きながら詰め寄る

416を狙つたように見せかけクイックブーストを用いてM4の方へ急速に方向転換し刃を振りかぶつた

「M4！」

SOP2は咄嗟にM4を突き飛ばしその一撃からM4を守つた

回避行動の後すぐさま体制を整えた416の射撃は命中しているが止まらない
よくも！と怒号を上げもう一度刃を振り下さんとする死神に対し背中に担いだケーブルを盾にする様に押し出した

既に砲身は展開している。弾き返した刃がもう一度振り下ろされる前にケースの銃口を死神のコアへと向ける

紙一重。死神は切つ先を振り下ろす事をやめ弾かれた方へと身体をずらす事でコアへの直撃を回避した

砕け散った左腕とその破片が舞う中、クイックブーストで体勢を整え再度の発射を試みるM4へ残る僅かなブーストをチャージし、蹴る。

確かに質量と僅かながらの瞬間的な加速による一撃は見事にM4を吹き飛ばした
416は焦りながらも冷静に頭を回転させる。自身が持つナイフではコアを切り裂けない。そして落ち着けるように「私は完璧よ」と幾度も頭の中で呟く。

(!!9! 借りるわよ!!)

意識の途切れた9が持つパイルバンカーを回収し死神へと飛びかかる

一瞬の殺氣を感じブレードを背後へと払えばパイルバンカーのぶつかり合い激しく
火花を散らした

見事だな。咄嗟にしては良い判断だ。

直後に416の腕からミシリと嫌な音が鳴りパイルバンカーを振るつた右腕が砕け

た

倒れた416を見ることなく死神は起き上がり息を整えるM4の方へと振り返る

信号がエラーを吐き出し身体が思うように動かない。この時ばかりは人間と似せられた存在である事を恨んだ

震える足で立ち上がれば416は倒れ死神の刃はもう一度こちらへと向いていた

鈍く光を反射する切つ先がゆっくりと迫つてくる。火花を散らす身体を揺らしながら、動かぬ脚を引き摺りながら、割れた装甲から覗く瞳に殺意を滾らせながら

終わりだ。

刹那、青い閃光がほんの一瞬輝いた

風を切り裂く音が鳴り死神のコアを貫いたのだ

M4も、死神も目を見開く

そうか、お前か…。

くつくつと小さく笑いぐらりと大きく揺れ膝を突き崩れた

ああ、これで…いい…これ、で…。

死神の赤い瞳が色を失つて、消えた

――――――

「言つたでしょ。アンタを仕留めるのは私だつて」

アーキテクトが修復したヒュージキャノン改を見つめながらWA2000は呟いた

i f Endgame VERDICT DAY

白煙が空に尾を引く、アレはなんだ。とMGの人形が指を指した

UMP45はそれに気付くと舌打ちと共に迎撃を命令する

弾幕の雨はあつという間にそれを撃ち抜き空に大きな爆発を作つた

だがそれだけでは終わらない。爆発の黒煙を切り裂くように更に数発のミサイルが空から降り落ちMGやRF人形達が潜む建物へと着弾し爆発を起こす。

しかしそだ、まだ終わらない。UMP45の気が逸れた反応一瞬、悲鳴と煙の中を突つ切り死神は蒼い輝きを放ちながら舞い降りた

視線が交差するUMP45の表情が驚愕から焦燥に変わる瞬間を見ながら死神は冷たく言葉を吐き出す

まずはお前からだ。

閃光が弾けた

ヒュージミサイルによる飽和攻撃、それに続くマルチプルパルス全門の一斉放火なんとも呆氣ない。人形だった何かがそこに転がっているだけだ

『使用限界。ページします』

マルチプルパルスをページし次にヒュージブレードを起動する
次は、お前だ。

416は突如の混乱を纏める為に集結の命令を下す

「無事な人形は集まりなさい！G11!!9と45を探してきて！」

損害が軽微な人形達が周囲を警戒しながら集結を始める

「クソッ…半数が行動不能か死んでる…」

怒りに顔を歪ませながら思考する

「45と通信が繋がらない…まさか」

ハツと顔を上げると同時に壁の向こうから間の抜けた416を呼ぶ声と共に自身を
目掛けて壁を融解させながら薙ぎ払う 巨大な炎だった
ヒュージブレードの刃

『使用限界。ページします』

ヒュージブレードを投げ捨てる。これで後1人

恐怖に支配され腰を抜かす人形、その場から逃げ出す人形、必死に抵抗する人形

先程作り上げた瓦礫の山から鉄筋の塊を無理矢理引き抜く。銃弾を真正面から浴びながら逃げ出す事すら演算できない人形達を叩き潰す。なんとも呆気ない
一体、一体ただ仕留める。抵抗する最後の人形を潰し終える

来たか。

死神は獰猛な獣の様に笑う

悲鳴にも似た憤怒の叫び

「お前ええええええええ!!!!」

恐ろしい程の殺気を撒き散らすUMP9がパイルバンカーを構えながらやつてきた
さあ、お前の仲間は全て地に伏せたぞ。

循環液で濡れた鉄筋の塊をUMP9へと振り下ろす。パイルバンカーの炸裂音が響き鉄筋の塊を粉碎する

破片と煙の中から死神が左手に構えたブレードが振り払われる。がそれを容易く避け左肩の装甲の隙間にパイルバンカーを叩きつけた

装甲の碎け破壊された左肩から循環液がボタボタと溢れ落ちる

「簡単には殺さないよ。次は右腕、その次は左脚、じわじわと斬り殺しにしてやる。」

死神が姿勢を整える前にUMP9は駆け出していた

お前は絶対に殺してやる

狙いを澄ました一撃が死神の右肩へと突き刺さる前に死神は全身の装甲を強制パージした

「？」

バラバラになつた装甲がUMP9の視界を一瞬にして埋め尽くすが構わず振り切る
だがそれは空を切つた。死神は既にUMP9へ一撃を繰り出していた
擬似生体パーツを多く流用するIOP製の戦術人形であつたのが不運だつた。死神
の放つた一撃はUMP9への循環器パーツを搖さぶり強烈な痛みは体勢を崩すに至つ
た

背中から倒れたUMP9に死神は馬乗りの形でマウントを取ると何の躊躇もなく自
身のコアに右手を捻じ込み引き抜いた

意図を察したUMP9は必死に引き剥がそうとするが細部のパーツに至るまで機械
で構成された鉄血の人形を動かす事は出来ない

「離れる！離れるお!!!離れるお!!!!」

紅い瞳をUMP9に向けながら死神はコアをオーバーロードさせていく
足搔くな、運命を受け入れろ

コアが真っ赤に輝き、次の瞬間爆炎が舞い上がつた

|||

ダミーリンクシステム接続終了、メインシステム起動モードに移行

死神は闇のような深い黒の装甲を身につけた軀体を起こす

グリフィンのダミーリンクシステムを応用した遠隔操作と発射機構だけを再現した
オーバードウェポン、ヒュージミサイルを用いた飽和攻撃とそれに乗じた強襲

奴らは『候補者』になり得なかつた

拍子抜けの程呆気ない戦闘への失望と共にため息を吐き出す、同時に財団の声が聞こ
えた

「J 肩慣らしは終わつたかい？」

十分だ。

「それじやあ始めよう。そして教えてあげなよ、彼女たちに可能性なんて無いんだつて
事をね！ハハハ！」

死神は残る者達を仕留めるために自身の戦いに終わりをもたらす者を願いを淡い期
待を込め飛び立つた

――

| |

生体パーツの焼ける匂いに瓦礫の山

突如発せられた救援信号を受け可能な限り部隊を集めランデヴーポイントへと降り立つたM4達は広がる光景に絶句した

「…404小隊達は」

生き残った人形から報告を聞こうとする前にエリザから通信越しに叫んだ

『死神が来る！構えろ！』

黒い影が落ちてきた

I c W 銃
f の a k e を 取 れ
y o u 暗 u p 狙
w a n t の a n d 定
a n で r u め
e n d 能
o f 性
t h e 示
d a r k し
み
せ ろ

死神は銃口をM4達へ向ける

「総員！構えて！」

戦闘が可能な人形達が死神へと銃口を向ける

「――――撃て!!」

最後の火蓋が切られた

迫る弾丸の雨を瓦礫の山や建物の残骸を盾に突き進む飛び出した所へ40mm HEが正確に撃ち込まれPAを揺さぶる、視界が晴れる前にスナイパーの弾が突き刺さつた

やはりお前か

死神は不敵に笑い攻勢へと移ろうとするがM4がそれをさせまいと指示を出す後衛を狙い死神も撃ち返す。SMGの人形達が前に立ちそれをさせない

偏頭障壁、一部のSMGの持つ固有能力。PAには遠く及ばないそれはたつた数瞬のみの発動に留まればPAを超える絶対的な防御と成る

M4は自身の演算能力をフルに生かし的確に命令を下し発動させる、その防御の後ろからWA2000を初めとするMGやRFの人形、SOP2達が徹甲弾を撃ち返す

遂に死神の右手のライフルが弾切れを起こした。その一瞬の隙を見逃さずWA2000は左手のライフルを撃ち抜き破壊した

ページします。弾の切れた右手のライフルを投げ捨てブレードを構える

目がいいのならこうだ

空中に何かを複数ばら撒く、死神の予想通りWA2000はそれを的確に撃ち抜い

た、それと同時に煙が空を満たす

「スマートグレネード!？」

呆気に取られた一瞬煙の中から何が落ち眩い閃光と炸裂音が響いた
WA2000は即座に反応し目を覆つたが他の人形は反応が良いあまりにそれを見
ていてしまつた。今この瞬間において自分を守る者はもう居ない

酷く反響する耳鳴りの中闪光を見ないうが為の腕を払うと死神は既に目の前に居た

「あ」

そして視界は暗闇に包まれた

WA2000を斬り伏せた死神は未だスタンの影響から抜け出せていない人形達を
斬り捨て、時には掴み他の人形へと投げつけていく

突き立てられたブレードから引き抜かれ投げられた人形がスタンの影響から抜け出
せていないM4へとぶつかる

防御姿勢も受け身も取れず「うぐつ…」と小さな悲鳴を上げてM4は倒れた
「M4を守つて！」

AR15のそんな号令に機能を取り戻し始めた人形達が態勢を整え射撃を始める
「絶対に近付けさせないよ！」

死神も残りわずかなPAの残量を確認し勝負に出た

——

ほんの一瞬の気絶、既に先程の影響から抜け出したM4の視界に入つたのは事切れた仲間の姿だった。

死神はAR15からゆつくりとブレードを引き抜きM4へと振り向く
お前で最後だと発した

「お前ツツツ!!!!」

M4の手に持つていたケースが展開する

そうだ。私をその殺意を持って殺して見せろ。

戦いはいい、私にはこれが、理不尽な死が必要だ。

「復讐だ……」

ブレードを構え飛び掛かる

ケースが火を吹く

死神の左肩を破壊する。止まらない

ケースが火を吹く

至近弾、止まらない

ブレードが迫る

ケースを盾に防ぐ。リミッターを外した脅力で殴り付ける
左腕で防ぐが碎かれる

ケースを構える、体勢を立て直した死神が迫る
ブレードは届かない

ケースが火を吹く、爆炎が死神を包んだ
ページします。無機質なOSが告げた

一か八かの賭け、直撃の瞬間に全身の装甲を強制的にページそのダメージを、
最小限に抑えた

ブレードが迫る、間に合わない

”ああ、みんな”

ブレードが突き立てられる

”ごめんなさい”

——

M4だつた人形からブレードが引き抜かれた

『流石だねJ』

：。好きなように生き、理不尽に死ぬ。か

『聞こえてるかい？』

ああ、聞こえている

『目的通り邪魔者は消えた。いや、例外に、キミに取つての”黒い鳥”にはなれなかつた。もうすぐでエリザの指揮命令に頼らない最初のＵＮＡＣが完成する。そうなればこの力は僕たちだけのモノになりやがてこの力を、技術を求めるようになるだろうね』財団は愉快そうに笑う

「人は人によつて滅びる。あちらでは証明できなかつた僕の預言をこつちなら…それまではJ、キミには戦つて貰うよ。僕が必要とする限り。キミが戦い続ける限りね』次の戦いへほんの少しばかりの期待を込め死神は小さな笑みを溢した。

Day. After Days

After Day

——メインシステム再起動……

——メインシステム通常モードを起動しました。

頭の中で声が響く

——おかえりなさい。あなたの帰還を歓迎します

?

妙だ。あの時私は死んだはずでは?

徐々にだが感覚が戻り、微かではあるが声が聞こえ始めた

「――――」

?

聴き覚えのあるような声

「――――マ！」

：確かこの声は……。

「起きろ！ファンタズマ！」

目が覚めた。見慣れた顔が一つニコニコとしながら覗き込んでいる

見知らぬ天井か…。まあいいか：久しぶりだなウロボロス。

「お主そういうキャラだつたか…？」

怪訝そうな表情をしながらウロボロスは手を差し出してきた

「起きれるか？」

問題ない。と答えつつも手を握る

私が再度口を開く前にウロボロスが喋り出す

「まあ言いたいことは分かる！エリザがなんか、こうなんやかんやしてくれたみたいだ
！」

ワハハと背中を叩きながら嬉しそうに話していく

そうか。

なんやかんやはと思ふが恐らくウロボロスもよく分かつてなさうなため普通に

返した

「反応薄いな」

微妙な顔をするウロボロスを横目に身体の機能を確かめる

全て問題なし。と自己診断が出るのでベッドから降りようとすれば
「ああ、再起動には成功したみたいだな。良かつた」

とエリザがM4と共に部屋に入ってきた

「エリザ、本当に大丈夫なんですか?」

「大丈夫だ。財団のやつに弄られてた部分もなるべく元に戻した。：本当に襲う気はないな?」

やはり不安なのかエリザにも疑問を向けられる

私をなんだと思ってるんだ。

「バトルジヤンキー」

「戦闘狂」

「私の部下」

上からエリザ、M4、ウロボロスだ

得意げにしながらニコニコしてるのはウロボロスだけだ。

「気分は?本当にバーサークしないな?」

なんかもう面倒なのでため息を一つ大きく吐き出して

問題ない。とだけ告げる

実際妙にスッキリしており頭はクリアだ。自己診断がまた頭も問題無し。と弾き出

した

そうだ。ウロボロス。

「ん？・どうした？」

約束は果たせなかつた。すまない

そういうえば、と私がウロボロスの言葉を思い出し謝罪すれば目を丸くしながら何言つてんだコイツ!?と言ふ顔をしながら
 「ファンタズマに謝られた…？やつぱり異常が残つてたのか…!?大丈夫か!?ハグしてお
 くか!？」

と肩を掴んで凄まじい勢いでガクガクと揺らしてくる
 もう本当に面倒なので無抵抗に揺さぶられるまま

前より無礼になつたな。

と溢した

少し他愛もない会話をした後にふと疑問を口にした

財団はどうした？

と問う

エリザが「そうだつた。少し待つていてくれ」と部屋を出ていき数分して戻ってきた
 「ほら、こいつだ」

と紐でドローンを引いてきた

「やあ、久しぶりだねJ」とドローンのプロジェクターから浮き出たやけに可愛らしいホログラムから財団の声が飛び出てきた

……無様な格好になつたな。

と零せば

「だから来たくなかったんだよ」とため息混じりに文句を垂れた

ホログラムの見た目と声が合わないからか笑いを堪えるのに必死なウロボロスと憐れむ心なんてもう捨てました。と言わんばかりの目をしたM4が居るがこれもスルーした。

なんだか滅茶苦茶なこの状況を飲み込めず現実逃避するために死神はそつと目を逸らし窓の外を見る

いい天気だ。いや、言葉は不要か…

他の連中も来たのか騒がしくなってきた後ろを振り返る事なく夢だと思うことにし、
目を閉じた